

第 1 章 総 括

総括的エッセイ

JSPS ワシントンセンター

菅原寛孝

学生時代、一時トーマス・マンに傾倒していたときがある。その作品のひとつに1947年に完成された「Doktor Faustus」というのがあり、私の記憶によれば、そのテーマは次のようなものであった。つまり、ドイツのインテリ層は政治、軍事に無関心でそれがヒトラーの台頭を許すことになった一因であり、彼らが気がついたときは、もうヒトラーを通じて『悪魔に魂を売る』以外に選択肢がなかった。

私は、日本の、大学における研究者を中心とするいわゆるインテリ層の多くは、第二次世界大戦以後の状況も似たり寄ったりではなかろうかという疑いをいつも持ち続けている。いずれ気がついたときは『悪魔に魂を売り渡していた』という事態にならないことを願うのみである。

私自身は、若いころから『戦争と平和』の問題に関して関心を持たざるを得ないような環境にいつもさらされてきた。学生時代は多くの同世代の学生とともに日米安保条約改定問題に否が応でも関心を持つようにほとんど強制されたといっても良い。研究者になってからは JASON Group のなかで軍事研究をする米国の理論物理学者の同僚たちとどう付き合っていくかで大いに悩まされた。ヴェトナム戦争のころ、それに協力的な JASON Group の一員をそれと知らずに日本での会議に招待しようとして特に左翼的な研究グループからほとんどつるし上げにあったという経験は、私に『戦争と平和』の問題について深く考える機会を与えてくれた。私自身政治的には左翼的な考えに同調していたし、現在でもその傾向は変わらないが、人間の行動を科学的に考えたい、という強い意欲はそのころから芽生えたようである。

今回、といってももう6年も前のことになるが、清水韶光さんたちと一緒に『戦争と平和』プロジェクトを総研大で立ち上げるにあたって、私個人としては、上記のようなバックグラウンドがあったのであるが、それに加えて、特に次の二点が契機として大事であった。

まず、第一に総研大本部のプロジェクトとして文系理系にまたがる学際研究課題を何とか立ち上げたいという高等研究センター長としての願いであった。いろいろなテーマが考えられたが、特に日本ではあまり進んでいない領域や、それなりに進んでいても特に総研大では実施されておらず、しかも実際には総研大が大いに貢献できる可能性を秘めているようなテーマを選択することとした。アメリカの、特にスタンフォード大学の友人たちの意見やカリフォルニア大学の研究者たちの意見も取り入れ、『戦争と平和』と『アーカイブズ研究』の、二つのテーマをその代表的なテーマとして取り入れることとした。もちろん他の先進的な研究課題とともに委員会の承認を得て正式に出発したのである。他にたとえば「Gender Research」のようなテーマも考えられたが、こうした学際研究だけに3テーマ

も割くのは予算的にも難しいということで断念した。

第二の契機は次のような2004年の7月に朝日新聞に載った柳沢桂子氏の記事である。

“1986年ユネスコは『暴力についてのセベリア声明』を出し、『戦争は人間の本能だという暗い考えを捨てて、平和な世界を築こう』と呼びかけた。この声明の骨子となっている考えは、「戦争が人間の本能であるという考えは科学的に間違っている」というものである。

私は、「戦争は本能であるという考えは科学的に間違っている」とはいえないと思う。もちろん今の段階で本能であるともいえないが。ここでいえることは、戦争というのは非常に根深い問題で、「平和、平和」と唱えたぐらいでは、なくならないということだと思う。

戦争についてDNAレベルまでさかのぼって深く研究して、なぜ戦争が起こるのか、どうしたらそれを防げるのかを多方面から研究することが必要であろう。”

実際に研究グループを立ち上げるに当たって直ぐに思い知らされたのは、第一点に関しては、まさに戦後の日本の精神風土そのものがいまだに息づいているということであった。大学がいかなる意味においても戦争に関与するのは良くない、戦争に関することが学問になるわけではないというようなある種の偏見がいたるところに蔓延している。そのような漠然とした思いから、こうしたプロジェクトは総研大にはふさわしくないというあまり根拠のない議論もなされたようである。

これと対照的にアメリカではほとんどの大きな大学には安全保障を研究する部門—研究所であったり学科であったりの違いはあるが—がある。もっとも有名なのはハーバードのKennedy SchoolのBelfer Centerやスタンフォード大学のHuber Instituteなどである。戦勝国としてのアメリカと敗戦国としての日本のこの極端な対比は文化人類学的にも興味のあるところではなかろうか。欧米と日本の対比の極端さから言えば『アーカイブズ学』のほうがもっとはなはだしいが、この場合は敗戦国とか戦勝国というよりはもっと奥深い文化的違いに根ざしているようであるが、これも興味ある文化人類学的課題であろう。

第二点に関しては、柳沢桂子氏の考えが必ずしも生命科学者たちすべてに共通の考えではないということであった。と、いうよりは 遺伝学的に人間の攻撃性を研究することの倫理性に関して自信がもてず、その社会的な負の影響をひどく心配する人たちが多くいるということである。これは厄介な問題ではあるが、解決可能な問題であり、われわれもそのように取り扱ってきた。倫理綱領といったものは時代時代によって変わるものである。ある意味で、人類がいろいろな知識を獲得するにしたがって倫理綱領も進化してきている。人間をよりよく理解することは必ずや将来の倫理の向上に寄与するであろう。

6年たった今、これまでのことを総括する時期になっていろいろなことを考えさせられる。私自身の個人的関与を織り交ぜながら感想を述べてみたい。

まずは生命科学と『戦争と平和』研究である。柳沢桂子氏の信念は、私も、そして多分このプロジェクトに最初から関与していただいた池村淑道氏も共有していると思う。この方向での研究はある意味でまだ始まったばかりである。アメリカでも生命科学と安全保障という方向の研究が組織的大規模に行なわれているわけではない。Huber Institute のある友人はその研究方向を意識的にかつ組織的に進めれば日本はきわめてユニークで先進的な安全保障研究の中心になれるのではないかと思う、と示唆してくれた。今後も『戦争と平和』に寄与していただいた研究者が個別に研究を進めていただけたらと思っているが、いつの日かこうした研究をも含む総合的な、Huber Institute に匹敵する研究機関を日本にも作りたいと思う。

私自身は、直接『戦争と平和』には関係ないが、DNA 内での情報伝達や進化における Mating の本質的役割に関する仕事を前者では池村氏、後者では高畑氏の指導の下に進めている。最近、DNA 内の Base pair の繰り返しなどは、電子伝導がある種の情報伝達に寄与しているのではないかという池村仮説を裏づけるものとして捉えようと思っている。Mating の重要性については論を待たないが、素粒子論の方法を使えば取り扱えるのではないかと思い、実際いろいろなプロセスに応用している。人間の攻撃性に関してはもちろん脳研究に大いに関連する。現在の PET や MRI では、mm の空間分解能しか出せず、ニューロンのサイズがミクロンオーダーであることを考えると脳の完全なマッピングは到底出来そうもない。そこで、個々のニューロンを見ながらなおかつ全マッピングが出来るような何か物理的プロセスがないかどうかを考えそれを実現する方策を考えている。乞う、ご期待。

Huber Institute は第一次大戦後の戦争に関するすべての記録を収集するという Huber 大統領の考えで作られた。翻って日本の状況はどうであろうか。二度にわたって体験した原爆に関する資料すら共通の目録がなく各機関にそれぞれの仕方で保存されている。もっとも貴重な資料を保持していると思われる放射線影響研究所にいたってはいまだにどういう資料があるのか全体目録すらない。それぞれの機関内部で問題を認識している人たちにより、個別的に大きな努力が払われているが、機関の指導者たちの理解と努力なしにはどうしようもないというのが実情である。文系理系を問わず、研究にとって生のデータほど大切なものはない。原爆という日本だけが経験したことに関するデータがこのような状況にあることは到底許されていいことではない。『戦争と平和』プロジェクトでは、そのことを理解し、清水リーダー、安藤学習院大学教授を中心に国内外での資料の状況把握、収集そして、資料を、研究者全体、国民全体のものにすべく努力してきた。幸い科研費によって今後もこの努力は続けられようが、関係各機関がぜひ早い機会にこの重要性に気づき全体としての協力関係が築かれるよう切に望むものである。

『戦争と平和』プロジェクトでは文系理系の研究者が入り混じったきわめてユニークな研究会を毎年開催してきた。出口氏によって指摘されている文系理系の言葉の違いというような問題を抱えながらの試みであるが、それなりの成果があったのではないだろうか。

私の印象に残った話を以下に簡単に述べてみたい。

戦争と平和の問題を考える上で、国家というものをどう捉えるかはきわめて重要である。その意味で社会学、政治学、人類学を問わずそれなりに曲がり角に来ているという意識をみんなが共有しているというのが強い印象である。マックスウェーバー以来の伝統的西欧的考え方にとって代わるべき枠組みをそれぞれの分野がそれぞれ違った方向で模索している段階ではなかろうか。

人類学者のアルジュン アパジュライはわれわれの招待に応じられなかったが、その著『さまよえる近代』の中で、ポストナショナルな配置について議論している。ポストモダンの世界が西欧の研究者によって議論されるとき、ともすれば非西欧化を口にするその口から無意識に滲み出てくる西欧中心主義が彼の中には当然ながらまったく見られない。彼をもその一員とするディアスポラが今後のポストモダン、そしてポストナショナルな世界を定義づけていくのであろうか。かれらにとってマックスウェーバー的国家理解は意味を成さない。それに変わるものとして彼らはむしろ、自然科学的なたとえば複雑系に関する理論などを志向しているようである。

ハーバードの入江教授はもともと伝統的志向の政治学者だったようであるが、最近はトランスナショナルな社会とかあるいは **Civil Society** といった今までとは違った概念を持ち出して、今後の社会のあり方、その理解の仕方を議論している。われわれの研究会においてもその考えを戦争と平和に関連付けながら議論していただいた。入江氏は NGO 等の活動で、西欧社会が先行して **Civil Society** に向っていくという印象を持っておられるようであるが、私は **Hezbollah** とか **Hamas** などの団体も NGO に加えて考え、むしろイスラム社会などが **Civil Society** になりつつあるともいえるのではないかという疑問をもつ。**Civil Society** が平和な社会かどうかはまったく別の問題である。

これに関連して武者小路教授などによる **Human Security** という考え方が提唱されており、それなりに先進的な考えではあるが、個人的体験としてワシントンのシンクタンクの方の安全保障関連の人たちに一蹴された。アメリカは二面性を持つ国家である。国内的には民主主義を国是として守り続けながら一方で対外的には全世界に軍事施設をもつ今世紀唯一の大帝国である。ワシントンはまさに帝国の中心、伝統的国家主義的志向が息づいている。**Human Security** などの概念には一顧だにしないという雰囲気がある。

われわれも『戦争と平和』研究の中で重要課題として取り上げた核軍縮について述べてみたい。米ロが冷たい戦争の残渣としての核弾頭をそれぞれ数千発所有している中で、オバマ大統領のイニシャチヴのもとに、核廃絶への動きが本格化する様子も見せている。それは、基本的には核兵器がテロリストの手に渡るかもしれないという恐怖感に駆られてのことである。しかしハードルはまだ高い。ロシアは自身テロリストに対する恐怖という点ではアメリカと共通するものの、核兵器を大量に持つことが国益であると考えている。また、アメリカの保守派もアメリカの核の傘がなくなったときに日本などが核武装するだろうと警戒している。

先日、私の古くからの友人でプリンストン大学の Von Hippel 氏がアメリカ議会で、“Nuclear fissile material”について報告したとき、“Nuclear Disarmament is easy. We just get rid of nuclear fissile material.”と、述べていたが、私は別の印象を持っている。核兵器はその有効性が完全に否定されない限り廃棄されないだろうと思う。そこで、核兵器に対する完全防護システムを技術的に可能ならしめる必要がある。昨年以来そのことについて荒船氏や藤本氏と技術的に検討しているが、不可能ではないと思っている。

最後に、最近、気がかりなことを述べて筆を置きたい。それは日本が元気をなくしつつあるという事実である。そしてそれをかの三島由紀夫が見通していたかもしれないという恐ろしき事態である。日本が元気をなくしつつあるという事実を証拠立てる必要はあるまい。1990年代以来の経済停滞、人口減少、若者の内向き志向、その他いろいろあろう。

三島由紀夫のメッセージは何であったか。彼は軍服を着て切腹した。それが彼の美学であった。国の繁栄は若者たちの赤い血によって贖われる。戦後の日本の繁栄は太平洋に散った若い特攻隊の隊員たちの血で贖われたものである。彼らの血はやがて地の中にふかく沈みやがて清らかな泉の水として全国土を潤した。これが日本を繁栄させた。しかし、やがてその泉も枯れてしまうだろう。そのとき、若い血は再び流されねばならない。そのときが近づいているのであろうか。

これは恐ろしい考えである。しかしこれを科学的に否定する根拠をわれわれは持たない。戦争は人間の本能ではないと言い切れないからである。

私はこの考えが恐ろしいと思うし、間違っていて欲しいと思う。しかし、アメリカは常に戦争をして若者の血を流してきた。イギリスもフォークランドで戦って以来、常にアメリカに追随して若者を戦場に送ってきた。アングロサクソンは血によって国が栄えることを知っているのだろうか。ユダヤ人たちの血はイスラエルによみがえったといえるのだろうか。パレスチナ人たちの血では何かがいつか贖われるのであろうか。

『戦争と平和』の研究は美学をも含んで時間的にも、空間的にも人的にも資料的にも大きな広がりをもっていることを認識させられる。